シンガポール訪問記
ー太平洋戦争の遺跡を訪ねてー

川島　順　　予科２１－７
（越谷市）　航空７－１

◆はじめに

小生にとってシンガポールは２度目の訪問である。１回目は 10 年前になるが、今回と同じ目的のＡＰＡＡ（アジア弁理士会）の総会に出席するためであった。その時はホテルの近辺とセントーサ島にしか行かなかった。

１０年たった現在、２００８年、シンガポールの経済は可なり好調で、ＧＤＰの成長率はここ数年６～８％と高く、既にＯＤＡを卒業して日本と共同して発展途上国の援助を行っている。シンガポール市内には高層ビルが立ち並び、街には人が溢れ、商店街も賑っている。地下鉄も２路線が新しく開通して、島の殆どの場所に地下鉄で行けるようになった。

ＡＰＡＡの総会は年に１度、アジアの各国が廻りもちで開催している。総会であるから会議や研究発表会等もあるが、小生は夜のレセプションに重点を置き、昼の会議はそこそこにしてなるべく余暇を作ってその国、その街の実情を自分の足で見ることにしている。今年は、戦争に関係のあった場所を重点的に見回わることにした。

シンガポールには政府によって建てられた、日本軍の上陸地点、ブキテマの攻防戦、日本軍の憲兵隊跡等の１１の戦争記念碑がある。この記念碑には英語、マレー語、中国語、タミール語の他に日本語の説明文が刻まれている。

◆シンガポール日本人会

ＡＰＡＡのオープンセレモニーのあった翌朝、日本人会に電話して、墓地公園の寄付のために訪問したいと来意を告げると応対に出た女性がどうぞということで、早速訪問することにした。

シンガポールの日本人会はシンガポール市の北方の住宅地の中にある。会員約４００名で、会員相互の親睦、日本とシンガポールとの友好・親善の他に日本人墓地の維持管理を大きな目的としている。

シンガポール日本人会

小生の宿泊したホテルはパンパシフィックホテルで、マリーンと呼ばれる海浜に近い地区にあり、日本人会に行くには地下鉄の Newton 駅で降りて歩いていけないこともないが、シンガポール市の道路は曲がりくねっており土地勘も無いので、まずはタクシーで行くことにした。もっと近いと思っていたが３０分ほど走り回って住宅地の一角に日本人会の看板を発見した。ゲートの傍の門番の女性に声をかけて入ろうとしたら、パスポートが無ければ入れないと言う。そこに現われたインド系のひげを生やした屈強なガードマンに来意を告げ受付に案内してくれと頼むが、パスポートとＩＤカードが無ければ駄目という。事前に日本人会に電話で了解をとってあり、しかも寄付しに来たのであると、更に食いさがるも、女性の名前までは確認していなかったので駄目だという。運転手も応援して色々言ってくれたが、頑として入れてくれない。そこにたまたま日本人らしいおばあさんの一団が入門してきた。とっさにそのおばあさんに話がしたいといったところしぶしぶ門を通してくれた。おばあさんの後に従いすぐ目の前にある建物に入り、入り口の受付けで、寄付を申し出、手続きをしながら、墓地公園への行き方や、シンガポール攻撃の火蓋を切ったサリンブン海岸への行き方などを聞き出した。当日は日曜で事務員も殆どいなかったので、受付の女性は来訪者の応対に忙しく、そこそこにして、待たせてあったタクシーに乗り、途中の花屋で菊の花を購入して、墓地公園に向かった。

◆日本人墓地公園

日本人墓地は日本人会から北東約１０分のところにある。タクシーは程なく、石造の門柱の傍らに「日本人墓地公園」と刻まれた石碑がたっている公園に到着。椰子等の南国の木が生い茂る園内には大小さまざまな墓石、墓標が点在

している。

日本人墓地公園

日本人墓地は明治時代から存在し、在留邦人の有志によって設置された。

第２次大戦の敗戦に伴い、日本人墓地は政府に接収されるが、その後返還され、現在は墓地公園として整備されている。この墓地には在留邦人は勿論､からゆきさんと呼ばれた女性たち、マレー戦線で亡くなった方、戦犯として処刑された方も含まれている。

カラユキさんの墓

その数約９００基といわれている。また、主な墓標については案内板でその位置が表示されている。

入り口近くには牟田口閣下がシンガポール攻撃時に戦死した将兵を祀った背の高い木製の慰霊碑が建っていた。「昭和十七年四月…」と大書され、その側面には陸軍中将牟田口廉也の名前がはっきりと読み取れた｡よくも木製の碑で、しかも戦後英軍に接収されていたこの墓地で今日まで無事に残っていたものだと感心する。

公園の右端には、からゆきさんの小さな石のお墓が沢山並んでいた。なんとなく寂しげで哀れであった。一番奥にあった寺内元帥の大きな石のお墓に代表として菊の花を捧げて合掌する。戦犯として刑死された方の墓は見つからなかった。

牟田口中将建立の慰霊碑

◆地下鉄に試乗する

帰りは最寄の地下鉄の駅までタクシーで行き、そこから練習を兼ねて地下鉄でホテル近くの駅、City Hall 迄乗る。初めは切符の買い方も分からない。自動販売機で切符の種類（片道や往復等）を指定して、表示画面に表示されている路線図の目的の駅をタッチする。金額が表示されるのでそれに相当する金額を入れると電子カードの切符が出てくる仕組み。３ドル２０セントの料金に対して１０ドル紙幣を入れると紙幣が押し戻されて電子カードが出てこない。機械が故障しているかと思い別の機械で何度やっても駄目。隣にいた親切な若者が自分の１０ドル紙幣と取り替えてくれたので、それを使用しても出てこない。結局、改札係りに文句を言うと小銭に両替してくれた。コインを使用するとやっと電子カードが出てきた。お釣りの多い大きい紙幣には対応していないのかもしれない。

また、料金には電子カードの保証料１ドルが加算されていて、降りて改札を出てから自動販売機にカードをいれリターンデポジットをタッチすると１ドルコインが帰ってくる。これも初めての人には気がつかないことで、みすみす１ドル損することになる。

地下鉄は現在３路線が運用されているが、現在環状線を建設中である。駅は日本と同様に路線の略号と共に一連番号がふられているので分かりやすい。プラットホームには都営地下鉄と同じ自動開閉の出入り口のあるスクリーンドアが設けられている。車両は日本製のものもあるという。車内や駅構内ではタバコは禁止されて

いるが、その外、飲食も禁止されている。車内の掲示板には、危険物は５０００$、タバコは１０００$、飲食は５００$と罰金額が表示されていた。マンゴも臭いので持込禁止になっているが、罰金額は書かれていなかった。日常的に車内で飲食をしている日本の若者にとっては要注意である。ところが携帯電話は何の規制も無い。車内でかけ放題である。現実に、クランジに行くとき隣の労働者風のおじさんが車内中に響き渡るような大声で延々としてしゃべっていたのには閉口した。

◆エクスカーションの一日

翌日はＡＰＡＡのエクスカーションで本島の東にある小さな島、ウビン島に物売り用の小船にのって渡り、自転車で島廻りをした。この島には昔ながらの小部落があり、１９６０年代のシンガポールの姿が残されている。椰子の木陰を縫って多少アップダウンとでこぼこのある小道を古くてこぎにくい自転車でのサイクリングは運動不足の体には良い運動になった。昼は島で唯一のレストランで、日本流の鋏や掻き出し棒が無いので大きな蟹の殻剥きに苦戦したが結構美味しかった。フルーツはマンゴ、パイナップル、スイカ、椰子の実等食べ放題。

ウビン島でのサイクリング

ところがウビン島から再び小船に乗って本島に上陸した際、国内の移動にも拘わらず厳重なセキュリティチエックが行われた。一見平和そのものに見えるシンガポールでも、先日の日本人会のガードマンといい、ウビン島のセキュリティチエックといい、平和を維持するためには、多くの対策と、心構えが必要であることを実感した。

◆戦跡巡り

４日目には、今回の目的の一つであった、戦跡めぐりをすることにした。日本人墓地の帰りの地下鉄の経験から、地下鉄で近くの駅まで行って後はタクシーを利用することにした。最初の目標は、クランジ海岸での戦い。地下鉄のクランジ駅まで行き、駅でタクシーを拾った。予めインターネットで戦跡記念碑のある場所の地図を入手していたのでタクシーの運転手に地図を示すと、最初の記念碑はクランジ駅の近くにあり運転手も知っていたので、数分で到着。晴天に聳える大きな**「クランジ戦没者記念塔」**は英軍の戦死者の慰霊塔で、その傍には２４００人の墓碑が並んでいた。記念碑の壁には戦死者の名前が刻まれているが中にはスパイであったことが判明してその名前が削られているものもあるという。入り口の脇には日本軍の侵攻の経路を示した模型と開戦から日本軍の撤退までの簡単な歴史が刻まれた銅版の記念碑があった。

次に向かったのが、**「クランジ海岸の戦いの記念碑」**。クランジ駅の西方に大きな貯水湖がある。そのダムの堤防の中間にあるクランジ貯水湖公園の海岸寄りにこの記念碑がある。この記念碑には「１９４２年２月１０日朝、侵攻する日本軍が干潮に乗じてこの海岸線に上陸した。泥に足をとられた将兵らは、英軍が流した油の中で立ち往生した。第１陣は、英軍が油に放った火により撃退された。しかし、サリンブンとジュロンに上陸しつつある日本軍に退路を絶たれる恐れから、英軍連合部隊に南方退却が命じられた。こうして日本軍は上陸を果たし、シンガポール侵攻の足場を固めた。」と日本文で当時の状況が極めて正確に記載されている。この場所は一寸入江となっているため波は極めて静か海岸線も平坦で上陸には絶好の場所と見受けられる。しかし、今は、静かな公園で戦いの跡はこの碑を除いて全く見あたらない。人影はまばらであるが、公園でベンチに寝転んだ男の若者が見受けられた。

次に、**「サリンブン海岸上陸の記念碑」**に向かった。案内図では Lmi Chu Kang RD.の Lane1 より入ると記されていたが、いくらあたりを探してもそれらしいものはない。タクシーで Lane１から Lane５迄行きつ戻りつ何べんも探しても見つからなかった。最後に、Lane５の入り口から左折してしばらく行くと下り坂の海岸線に近い場所でようやく碑を見つける。この碑には「このマングローブの海岸線からシンガポール侵攻の火蓋が切って落とされた。１９４２年２月８日夜、日本軍第５師団と第１８師

団は砲火の援護を受けつつ、渡船艇を並べてジョホール水道を渡った。日本軍は２度上陸を試みたが、第２２オーストラリア旅団によって撃退された。

しかし、３度目の攻撃で防御を突破し、翌９日朝までにテンガ空軍基地を攻略した。」と日本文で記載されている。

サリンブン海岸上陸の記念碑

海岸線には鉄条網が張られていて、浜辺までは行けなかったが、辺りは樹木が生い茂り、起伏に富んだ地形をしていた。実際にこの場所に立ってみると、ジョホール水道を挟んだ対岸のマレーシアのジョホール・バルが間近に見える。山下将軍はジョホールのサルタンの鐘楼に昇って上陸地点の選定をしたと云われている。

サリンブン海岸よりジョホールバルを望む

一応目的を達したので、タクシーでクランジ駅に戻り、駅構内の小さな食堂でカップラーメンみたいな不味いラーメンをすすり、駅周辺を探索した後、再び、地下鉄で City Hall 迄戻った。途中の駅数は１７程あり、クランジからの所要時間も４０分程で、殆どの駅の周辺には高層マンションが立ち並び、おそらくシンガポール市内に勤める市民のベットタウンになっている模様であった。もっと荒れた原野を想像していたが意外に開けていて道路などもよく整備されていた。

地下鉄沿線の駅前に立ち並ぶ高層ビル

◆インド国民軍の記念碑

City Hall の駅の近くに、戦争記念公園があり、その中に、インド国民軍の記念碑があると文献に書かれていたので見つけに行った。市街地の地下鉄はその名の通り地下を走っているので、駅からは地下道が縦横に伸び商店、食堂がひしめいている。地下道からひょっこり地中に出ると方向が分からず、迷子になる。この公園は駅の直ぐ傍にあるにも拘わらず誰に聞いても知らないという。駅周辺を一回りしてやっと戦争記念公園を見つけた。

公園の真ん中に大きな記念塔が聳えていた。傍によって見ると**「日本占領時期死難人民記念碑」**中国と語と英語で書かれていた。この記念碑は日本軍の占領中に殺された人の慰霊塔で、華僑系の団体がシンガポール政府に働きかけて１９６７年に建設したもので、中国人、マレーシア人、インド人、ユーラシア人を表す４本の柱が天に向かって伸びて先端で一本になっている。殺された人の数は中国側は５万人と主張しているが、日本側は６千人と大きく食い違っている。

日本占領時期死難人民記念碑

一寸暗い気持ちになったが、気を取り直して、**「インド国民軍の記念碑」**を探すことにした。ところが狭い公園を隈なく探しても見つからない。インド国民軍（ＩＮＡ）は日本がシンガポールを占領した時に英軍に属していたインド兵が中心になってインド開放を目的として創設されたもので、インパール作戦等では日本軍と共に戦っている。この記念碑は戦争中に建てられたが、日本の敗戦に伴い進駐してきた英軍によって破壊され、シンガポール独立後再建されたとのことである。

日本に帰ってから調べてみると、ＩＮＡ記念碑は戦争記念公園の隣のエスプラネード公園にあることが分かり、思い違いによって折角のチャンスを逃したことを悔やんでいる。

◆街なかにて

シンガポールの市街には地下鉄を中心とした地下街が多く、ホテルやモールとを結んでいる。地下街には商店、レストラン等が軒を並べていて、子供づれの家族等で賑っており、また、手をつないだカップルが極めて多く見受けられる。

ところがインターネットで調べてみると、日本と同様にシンガポールは少子化、高齢化が大きな社会問題になっていて、出生率は日本の１．２９を下回る１．２４と低く、シンガポール政府は様々な政策を実行している。その主なものは、ベビーボーナスの支給、出産休暇の延長、託児費の支給等であるが、変わったものは、メイド雇用税の軽減である。シンガポールでは共稼ぎが多いので、殆どの家庭ではメイドを雇っている。メイドを雇うと税金がかかるが、小さな子供がいる家庭はその税金が低減される。

前述の如くシンガポール経済は順調で、景気も悪くないそうだが、戦跡記念碑を訪ねた時の公園といい、あちこちの郊外の公園には、青年が数人ベンチ等に寝転がって一日何もしないで過ごしている姿がよく見られた。これは、日本で云うニートではないか。身なりはそれほど悪くはなく、いわゆるホームレスでもなさそうだ。どこの社会でも落ちこぼれがいるのであろうか。

一寸心を痛めた例では、ホテルの近くのシンガポール川のほとりを散歩していた時、小雨が降ってきた。川岸に建てられた小さな休憩室にインド系と見られる子供づれの集団、大人４～５人、子供３～４人が休んでいた。そこに、大柄の家長と見られる男の人が数枚の折りたたんだダンボールの箱を小脇に抱えて帰ってきた。すると、この一団は川岸の石畳の斜面を川に向かって降りていった。何をするのかと、川を覗くと誰もいない。一寸出っ張った護岸のコンクリートの下がえぐれていて、おそらくその中が雨をしのぐ一夜の宿になっているのではないか。身なりは皆ちゃんとしていたが、川面すれすれのそのような場所に宿を求めなければならない彼らにはどのような事情があるのか分からないが、中国系に経済の実権を握られたシンガポールでは、はみ出した人種の生活は可なり苦しいようだ。

反省

十分用意をしてきた積りであったが、実際現地に来てみると道路が曲がりくねっているので、地図と現地の関係がつかめず、場所を探すのに苦労した。また、日本人会で情報を仕入れる積りで来たが生憎日曜日で事務員がおらず、十分な情報が入手できなかった。

日本人墓地でももっとゆっくり時間をかけて刑死した人の墓や連隊や部隊の名前の入った墓標等を探せばよかったが、時間に追われて十分な成果が得られなかった。クランジの戦跡では、記念碑の写真を撮ったものの、文字が判読できない箇所があり、碑の日本文は“ＹＡＳＵ”氏のウェブサイトの文章を転記させていただいた。インド軍記念碑は場所を勘違いして結局見つけることができなかった。

やはり、現地の人の協力を予め取り付けておいたほうが良かったかもしれない。

平成２５年４月　秩父　１１９号

続シンガポール訪問記

川島　順　　予科２１－７
（越谷市）　航空７－１

はじめに

小生シンガポールを訪れたのは３回目である。１回（1987），２回(2008)とも APAA（アジア弁理士会）の理事会に出席するためであった。２回目の訪問については秩父２１年１月号に紀行文を投稿した。今回の訪問は２０１２年１１月２９日から１２月３日迄、理科大のシンガポール同窓会の設立記念式典に出席するためで、理科大 OB８名と共に団体ツアーを編成して５日間行動を共にした。

シンガポール市内は４年前に来たときと同じ様に綺麗な高層ビルが建ち並び、町には若い人で溢れていた。一つだけ変わった点はマーライオン公園の湾を隔てた対岸に、３つの大きなビルの屋上を繋ぐようにして作られた大きな船を乗せた奇妙なビルが新築されていた。

マーライオンと屋上に船の載ったホテル

１．シンガポール理窓会記念式典

記念式典は１２月３日、シンガポール日本人会のボールルームで行われた。

出席者は、シンガポール在住の同窓生約４０名、来賓、理科大理事長、学長を始め同窓会員約３０名。式典は、塚本桓世理科大理事長の開会挨拶に始まり、藤嶋昭理科大学長の「東京理科大学の一層の発展を目指して」と題しての記念講演、顔尚強シンガポール日本文化協会名誉会長の「Singapore---An Opportunity Land」と題する記念講演を拝聴した後、議事に入り、会則制定後、役員選出の結果、顔尚強（1966 年理科大卒）氏が会長に選任される。

２．顔 尚強氏の講演要旨

国土が狭く資源の無いシンガポールがなぜ今のような発展を成し遂げたかを、シンガポール政府の政策、官僚制度の改革、知的集約産業の振興、教育事業の改革、一歩先の変化に対する対策について解説された。

講話中の顔氏

この中で特に興味を持ったものは、

（１）法改正とインフラ整備

①労働運動を抑制する法律改正、例えば、労働時間を３２時間から４４時間に増大、有給休暇を１４日から７日に縮減。

②税制改革として２５万ドル以上の投資には免税、個人所得を最高２０％に抑える。相続税を０にする。外資系法人税を１７％に抑える。

③土地が投機対象にならないように土地徴用法の制定。利用権は３０年まで。

④港、空港、銀行、道路等のインフラ整備に力を注ぐ。

（２）官僚制度の改革：

公務員は７万人で同じ職場には長くいられないようにし、実力、実績によって評価する。この内、実権を握っているのは３２０名の事務次官級の人材であるが、同様に実力、実績によって３～４年で転勤させられる。

（３）政府系企業集団（GLC）：

国の産業の牽引車として GLC があるが、GLC 上場企業３７社の時価総額は上場企業約６００社の時価総額約３０兆円の約４０％を占めている。エリート官僚は GLC に天下って首脳部として活躍できるが、一旦業績が振るわなくなれば経営責任者の座から降ろされる。こ

のようにして GLC の国際競争力を付け、シンガポール経済の発展を推進している。
（４）水資源：
　シンガポールには水資源は無いので、水はマレーシアからパイプで供給されている。水の自給自足も政府の大きな課題であり、雨水の利用、家庭・企業の排水の循環使用、汚水の浄化、海水の淡水化等の研究を２５の研究室で研究し、実行に移しつつある。
（５）教育事業：
　少子化対策として優秀な留学生を積極的に確保し、優秀な学生、研究生には市民権を与える。また、知的集約産業として、大学では生命科学や IT 産業の研究を奨励している。

３．旅行中に得た豆知識

　シンガポール滞在中は市内や対岸のジョホールバル等を見学するため専用車で移動したが、ガイドの説明や見聞きした面白い話を２，３紹介したい。
（１）住宅事情：
　顔氏の講演ではシンガポール市民の８７％は持ち家を持っているとのことであったが、市内にある土地付きの住宅は、４～５億円もし、とても一般市民には手が出ない。市内にある集合住宅でも約１億円位する。一般市民は郊外の公共の集合住宅に住んでいる。賃貸価格は Ｓ＄７００～１０００（日本円で５万円～７万円位）郊外の地下鉄の沿線では公共高層住宅が延々と続いている。
（２）自動車：
　シンガポール市内の交通事情から自動車は極力増えないような様々な税金・制約がかかる。その一つが自動車購入権である。自動車を購入する場合、まず、購入権を手に入れなければならない。購入権は市場が形成されていて、現在は約３００万円する。それ以外に、販売価格とほぼ同じ程度の税金がかかり、保険や手数料を入れると、２５０万円程度の車は１０００万円位になる。
（３）ガソリン：
　シンガポールのガソリン価格は約１４０円であるが、マレー半島ではその半分以下で買える。
　週末になるとガソリンタンクをほぼ空にしてマレー半島に行き帰りに満タンにして帰ってくる車が急増したので、シンガポールを出てマレーシアに行く３／４以上のガソリンが入っていない車には罰金をかけるという法律（３クォータ・タンク法：罰金 S$500）が制定された。道路の横には写真のようにガソリンメータが３／４の所を示している看板が立っている。

ガソリンタンク3／4以下の車は戻れの標識

（４）水事情：
　シンガポールの水はマレー半島から鉄パイプで送られてくる。シンガポールとマレーシアを結ぶ橋はコーズウエイと呼ばれ、その橋の横に直径１ｍ程の３本の鉄パイプが架設されている。このうち２本はマレー半島から送られてくる水の給水パイプで、シンガポールの浄水場で浄化された水の内半分は残りの１本のパイプでマレーシア側に送り返されている。このように浄化された水を送り返すことにより給水料金をタダにしていた。しかし、最近マレーシアが値上げを要求してきたので、３本分全部購入することとなった。

コーズウエイ橋の横に架設された給水パイプ

　このようにシンガポールとマレーシアの関係は必ずしも良好とは云えないので、シンガポールでは顔氏の講演にあるように様々な方法

で水を確保している。その一つとして、マーライオン公園の前の湾を海から堰き止め、浄化する事業が進められている。現在の湾の水は茶色に濁った汚い水であった。なお、向こう岸に建っている建物は現在はホテルであるが、日本軍の占領時代は病院として接収されていた。

浄水用の濁った水の湾内と占領時の病院

（５）ジョホールバル

今回の目的の一つに、大東亜戦争緒戦においてジョホールバルで山下将軍がモスクの望楼からシンガポール島を双眼鏡で偵察し、上陸地点を決めたといわれているが、そのモスクの望楼からシンガポール島を撮影したいということである。

アグバカールモスク

生憎、団体行動であったのでモスクの望楼に入ることが出来なかったので、その裏庭からシンガポール島を撮影した。しかし、朝靄でシンガポール島は霞んではっきり撮れなかったのが残念である。

ジョホールバルからシンガポール島を望む

（６）夜の屋台

我々の泊まったパークロイヤルホテルはジョホール海峡の海岸に近い所にある。ホテルの直ぐ傍に小さな夜店が一杯並んでいる。夜になると、道路迄はみ出したテーブルで大勢のお客がビールを飲んでいる。店の前には大きなガラス箱の中に数十匹のアラスカ蟹が生きたまま入れられている。値段はS$１０～１５、即ち１０００円前後である。安いので食指が動いたが生憎夕飯を食べた直後なのでそのまま見過ごした。

生きたアラスカ蟹のショーウインド

後で人に聞いてみると値段は１００ｇ当たりの値段で、一匹丸ごとでは約１０～１５倍すなわち１万円から２万円位になる。食べなくて良かった。手前のスリランカからの黒い蟹は安いそうだ。

（７）日本人墓地公園：

日本人墓地公園は前回の旅行記でも紹介したが、日本人会が管理している墓地で、戦前のシンガポールゆかりの人やからゆきさんのお

墓がある。前回来たときは、戦犯として処刑された方の墓が見当たらなかったので、自由時間に再度それを確認するために訪れた。

たまたま、お墓で落ち葉を掃除している人がいたので聞いてみると、お寺の裏庭に案内された。

そこには「殉難者納骨百三十五柱」と刻まれた小さな石柱がひっそりと片隅に建てられていた。そのほか、近歩４聯隊、近歩５聯隊、その他の戦没者、自決された殉難者の慰霊碑等が６～７基建てられてあった。

日本人墓地の入口

法務死された１３５柱の墓標

陸海軍人軍属　留魂之碑

川島　順（APAA 会員）

はやぶさ国際特許事務所

２００８年１１月記